

日本におけるネットいじめの現状と対策(1)

—小学生・中学生・高校生を対象とした加害行動の実態調査—

The current situation of and counter-measures against cyberbullying in Japan(1)

鈴木 佳苗¹ 熊崎 (山岡) あゆち² 桂 (赤坂) 瑠以² 坂元 章² 樺淵めぐみ¹

Kanae SUZUKI¹ Ayuchi KUMAZAKI² Rui KATSURA² Akira SAKAMOTO² Megumi KASHIBUCHI¹

筑波大学¹ お茶の水女子大学²

University of Tsukuba¹ Ochanomizu University²

<あらまし> 本研究は、全国の小学生から高校生を対象としてネットいじめの具体的な加害行動の生起状況についての質問紙調査を実施し、今後のネットいじめの予防・低減に向けた対策を検討するための基礎情報を得ることを目的とする。調査の結果、1)ネットいじめの加害行動経験率は小学生から高校生を通じて少ないが、年齢が上がるにつれて増加傾向にあること、2)ネットいじめと学校でのいじめに共通して、加害行動の中でフレーミング、ハラスメントが多く見られたことなどが示された。

<キーワード> インターネット、ネットいじめ、学校でのいじめ、加害行動、カリキュラム開発

1. はじめに

近年、携帯電話の普及に伴い、インターネットを通じて特定の児童生徒に対する誹謗・中傷が行われるなどの「ネット上のいじめ」(以下、ネットいじめ)の問題が生じている。この問題への対策として、情報モラル教育、保護者への啓発などがあげられている(文部科学省, 2008)。今後、より具体的な対策を検討していくためには、どのような種類のネットいじめがどのくらい生起しているのかといった基礎情報が必要であるが、これまでに十分な情報は得られていない。また、ネットいじめについては、従来の学校でのいじめのレポーターの1つ(手段としてインターネットを利用したいじめ)であるという指摘があり(加納, 2011)、学校でのいじめの現状も把握しておく必要があると考えられる。

そこで、本研究では、全国の小学生から高校生を対象とした調査を実施し、どのような種類のネットいじめおよび学校でのいじめの加害行動がどのくらい生起しているのかを検討した。

2. 方法

2.1 調査対象者

ネットいじめおよび学校でのいじめの加害行動の調査への協力校^(注)は、小学校 19 校 1270 名(男子 638 名、女子 632 名)、中学校 32 校(男子 1710 名、女子 1382 名)、高等学校 10 校(男子 1048 名、女子 703 名)であった。

2.2 質問項目

ネットいじめ 小野・斎藤(2008)の 8 種類の行動(「①フレーミング(挑発行為、敵意的言語表

現)」「②ハラスメント(迷惑行為)」「③サイバーストーキング(迷惑行為のより悪質なもの、犯罪行為)」「④デニグレーション(中傷行為)」「⑤インパースネーション(なりすまし)」「⑥アウトティング & トリックリー(個人情報の暴露)」「⑦エクスクルーションまたはオストラシズム(仲間はずれ)」「⑧ハッピースラッピング(暴力行為の撮影)」)に基づいて各 1 項目の計 8 項目を作成した。また、同じ学校の仲間にネット上でいじめを呼びかける行動についての 2 項目を加えて計 10 項目とし、この 1 か月間に経験があるものすべてを選択するように求めた。いずれの加害経験もない場合のために、このようなことは「まったくなかった」という項目も含めた。

学校でのいじめ ネットいじめの加害経験の項目に基づいて学校場面でいじめの加害経験の 10 項目を作成し、身体的、間接的攻撃に関する各 1 項目を加えた計 12 項目を用いた(項目選択の教示はネットいじめ加害経験と共通)。

2.3 手続き

調査はクラスで一斉に実施した。回答済み質問紙は、回答者自身が添付の封筒に入れて封をした後で回収した。

3. 結果・考察

3.1 ネットいじめおよび学校でのいじめの加害行動の経験率

最近 1 か月間のネットいじめの経験者率は、小学生 1.0%、中学生 4.6%、高校生 7.8%であった。学校でのいじめの加害行動の経験者率は、小学生 31.6%、中学生 38.0%、高校生 32.7%であった。

このように、ネットいじめの加害行動経験率は小学生から高校生を通じて少なかったが、年齢が上がるにつれて増加傾向にあることが示された。

^(注) 調査対象地域の選定については、鈴木・坂元(2011)に示した。

3.2 ネットいじめと学校でのいじめの個別の行動の経験率

表1、表2にネットいじめと学校でのいじめの個別の加害行動の経験率の上位5件を示した。ネットいじめの加害行動の中ではフレーミング、ハラスメント、エクスクルージョン・オストラシズムなどが多く見られた。また、学校でのいじめの加害行動の中ではフレーミング、ハラスメント、身体的な加害行動などが多く見られた。フレーミング、ハラスメントは、ネットいじめ、学校でのいじめに共通して多いことが示唆された。

3.3 今後の課題

本調査により、ネットいじめおよび学校でのいじめにおいて、より多く生起する加害行動の内容が示された。今後は、これらの行動に焦点を当てた予防・低減のためのカリキュラム開発を進めていく必要があると考えられる。

表1 最近1か月間のネットいじめの加害行動(%)

順位	小学生	中学生	高校生
1	同じ学校の一人にだけメールを送らなかった(⑦) 0.5	メール(パソコンや携帯電話)で、同じ学校の人に悪口を送信した(②) 2.5	ネット上で、同じ学校の人をからかった(①) 4.7
2	メール(パソコンや携帯電話)で、同じ学校の人に悪口を送信した(②) 0.3	ネット上で、同じ学校の人をからかった(①) 1.8	メール(パソコンや携帯電話)で、同じ学校の人に悪口を送信した(②) 3.1
3	ネット上で、同じ学校の仲間に、「Bさん(同じ学校の人)を友だちリストからははずそう」と呼びかけた(*) 0.3	同じ学校の一人にだけメールを送らなかった(⑦) 1.0	同じ学校の一人にだけメールを送らなかった(⑦) 1.3
4	同じ学校の人を身体的、精神的に傷つようなことをされているシーンを撮影し、ネット上に掲載した(⑧) 0.2	ネット上に、同じ学校の人と異なる情報を書き込んだ(④) 0.5	ネット上に、同じ学校の人と異なる情報を書き込んだ(④) 1.0
5	ネット上で、同じ学校の人をからかった(①) 0.1	ネット上で、同じ学校の仲間に、「Bさん(同じ学校の人)を友だちリストからははずそう」と呼びかけた(*) 0.4	ネット上で、同じ学校の人になりすまして、その人が困るような情報を書きこんだ(⑤) 0.7

表2 最近1か月間の学校でのいじめの加害行動(%)

順位	小学生	中学生	高校生
1	同じ学校の人をからかった(①) 18.7	同じ学校の人をからかった(①) 28.4	同じ学校の人をからかった(①) 27.6
2	同じ学校の人に悪口を仲間に言いふらした(②) 12.9	同じ学校の人を押ししたり、つねったりした(身体) 15.5	同じ学校の人を押ししたり、つねったりした(身体) 9.3
3	同じ学校の人を押ししたり、つねったりした(身体) 12.8	同じ学校の人に悪口を仲間に言いふらした(②) 11.1	同じ学校の人に悪口を仲間に言いふらした(②) 5.8
4	同じ学校の人に持ち物を隠したり、こわしたりした(間接) 6.4	同じ学校の人に持ち物を隠したり、こわしたりした(間接) 5.0	同じ学校の人に持ち物を隠したり、こわしたりした(間接) 2.3
5	同じ学校の人に事実とは異なる情報を仲間に言いふらした(④) 3.5	学校で、同じ学校の仲間に、「Aさん(同じ学校の人)に話しかけないようにしましょう」と呼びかけた(*) 3.4	同じ学校の人に事実とは異なる情報を仲間に言いふらした(④) 2.2

注:括弧内の①から⑧は「2.2 質問項目」の8種類に対応しており、*はネットいじめへの呼びかけに関する行動、「身体」は身体的攻撃、「間接」は間接的攻撃に対応している。

引用文献

- 加納寛子(2011) ネットいじめ 現代のエスプリ no.526 ぎょうせい
 文部科学省(2008). 「ネット上のいじめ」に関する 対応マニュアル・事例集 (学校・教員向け) <www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/11/08111701/001.pdf>
 小野淳・斎藤富由起(2008) 「サイバー型いじめ」(Cyber Bullying)の理解と対応に関する教育心理学的展望. 千里金蘭大学紀要, 35-47.
 鈴木佳苗・坂元章(2011) 平成22年度共同研究報告書 インターネット利用といじめの関係性に関する研究 三菱総合研究所

付記:本研究は、三菱総合研究所、安心ネットづくり促進協議会と連携して行われた(鈴木・坂元, 2011)。調査実施にあたり総務省の協力を得た。また、本稿および一連発表の(2)をまとめ、発表するにあたり、最先端・次世代研究開発支援プログラム「ネットいじめ研究の新展開 -『行動する傍観者』を生み出すプログラマー」(研究代表者:鈴木佳苗)の助成を受けている。